

安岡章太郎

酒屋へ三里
豆腐屋へ二里

酒屋へ三里
豆腐屋へ二里

酒屋へ三里
豆腐屋へ三里

安岡章太郎

福武書店



安岡章太郎（やすおか・しょうたろう）
 一九二〇年、高知県に生まれる。慶応義
 塾大学卒業。五三年「悪い仲間」読者の
 光景」で芥川賞受賞。六〇年「福島の
 七年」幕が下りてから」で毎日出版文化
 賞受賞。八二年「流離譚」で新潮日本文
 学大賞受賞。八八年「僕の昭和史」で野
 間文芸賞受賞。著者として他に「舌出し
 天使」「花祭」「私説聊斎志異」「安岡章太郎
 集 全十巻」などがある。

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里

一九九〇年五月一〇日 第一刷印刷
 一九九〇年五月一日 第一刷発行

著者 安岡章太郎

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二二二一八
 号 電話(〇三)二三〇二二三一
 振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)
 (定価はカバーに表示しております)

©S. Yasuoka 1990
 Printed in Japan

ISBN-4-8288-2336-0 C0095
 NDC914 194 220P

目次

かるたの教訓

7

まぼろしの生徒

17

ぼんやりした不安

28

下克上の学問

39

畏怖すべき光景

51

ピタゴラスと豆カン

61

難聴と音楽

71

沖の干潟

81

歩行運動

99

同病相憐

112

隣人の声

132

黄葉から青葉へ

148

雁

170

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里

192

表紙絵 与謝蕪村

〔夜色樓台雪万家〕より

装丁 田村義也

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里

かるたの教訓

イロハがるたのことから始めよう。べつに正月だからといふことではない。決して芽出度くはない、むしろ不景氣な、意氣上らざる話なのだ。

じつはこの一年、私はメニユエル氏病といつて目まひの病氣に悩まされた。一年といつても、後半は予後の用心で大したことはなかつたが、前半、それも最初の三箇月はとくにひどかつた。暮の二十九日、夕刻、正月用の餞餅がとどいたので、それをちよつとつまんで自分の部屋へ戻ると、いきなり目が廻りはじめた。これはてつきり脳をやられたものと思ひ、自分も六十半ばまで生き

て、これで人生も終りか——、そんなことをグラグラする頭の片隅で考へた。

しかし翌日、病院へ行つて診てもらふと、これは脳溢血でも脳血栓でもなく、メニエール氏病といつて芸能人、とくに中年過ぎの女優さんなんかがよくかかる病気だが、命にかかはるものではないと言はれ、私はほつとすると同時に、何だか拍子ぬけがしたやうで落胆もした。私は、いはゆる戦中派で、不惜身命、常在戦場、といふやうなことばかり聞かされてきたせゐもあつて、自分の体が自分のものではないやうな気分が何処かにある。それで医者——とくに兵隊のときの軍医——のところへ行つて、「大したことはない」と言はれると、まるで仮病でも使つてサボらうとしてゐるのを見破られたやうな、妙な氣後れを感じるのだ。とくに「芸能人とか中年過ぎの女優のかかる病気」と言はれると私は、はなはだ不面目なことでも仕出かしたやうな心境になつた。

あるひは、こんなことを言ふのは私の芸能人に対する職業的偏見、ないしは

差別のあらはれであるかもしれない。そして、たしかに私はその罰を蒙つたにちがひない。年が明けて、正月の四日から私は激しい目まひに襲はれることになった。この目まひについては、よそにも書いたから、どんなものかは省略するが、要するに小舟のつて太平洋の荒波に揉まれてゐるといふやうなものだ。それが五、六時間、ないしは十時間以上もつづくのである。しかも、ふだん発作の起つてゐないときには何といふこともない。熱もなければ、脈も血圧も正常である。さういふところが、この病気の「芸能人のかかる」といはれるゆゑんかもしれないが、とにかくケロリとしてゐるのである。ただ、目まひの発作は繰り返してゐるうちに、だんだんひどくなつてくるし、また発作が起りやすくなつてくる。

一番こまつたのは本が読めないことだ。これも最初は理屈っぽい評論のやう

なものを読むと発作が起つてゐたのだが、そのうちどんなものでも、新聞であらうが、週刊誌であらうが、字を見てゐると、たちまち目が廻りだした。また映画もダメだし、テレビもいけない。かうなると、俄かに眼が見えなくなつたやうなもので、寢床のなかでラジオをきくぐらゐしか時間のつぶしやうがないのだが、ラジオもさう何時間もぶつつづけに聞いてゐられるものではない。そこで、イロハがるたのことを憶ひ出したわけだ。

戦争中、空襲警報の出てゐるとき、灯火管制で真暗な部屋の中で私たちは、よくイロハがるたを「イ」から順番にそらで憶ひ出す遊びをした。そのとき思つたのは、イロハがるたの文句には子供の遊びとしては、いかにも陰惨なものや、露骨に意地の悪いアテコスリ、それに何度考へても意味のわからないものが多いといふことだつた。たとへば、「盗人の昼寝」とか、「月夜に釜をぬく」とか、「すいが身を食ふ」とか、さういふものは大学生だつた私たちが頭をひ

ねつて考へても、よくわからなかつた。また、陰惨で残酷なアテコスリの例には「かつたゐのかさ恨み」といふのがある。しかも、この種の残酷なものや不可解なものほど、印象に強くのこるらしく、イロハ順に挙げていつても、からいふものは真先きに頭に浮かんだ。

それにしても、「りちぎ者の子沢山」とか、「屁をひつて尻すぼめ」、「あたま隠して尻隠さず」など、江戸の人の考へることは、何と即物的で卑猥なものが多いことか。私は目を廻したあと、薄暗い部屋の中で頭をかかへながら、こんな文句を考へついた人のことを想ひ出してゐると、私自身を含めて日本人といふものが、いかにも卑屈で小ズルく貧しげな人間であるやうな気がしてきた。

何でも、イロハがるたを最初に考へたのは弘法大師で、また歌留多の最古のものは、承暦三年（一〇七九）作の万葉仮名で書かれたものがあるといふことだが、それは今一般に流布してゐるのは別の文句のやうだ。われわれが子供の

頃に習ひおぼえたイロハがるたは、やはり江戸の後期になつて出来たものといふ。つまり、庶民の間に文字が普及した頃に、ひろまつたものなのだらう。大江戸八百八町などといふが、江戸市街の大部分は全国各藩がおいでゐる藩邸、武家屋敷であつて、町人や職人などの住む土地は全体の一割か二割あるかないかだ。そんな狭苦しいところに何十万人も押し込められて暮らしてゐたのが江戸庶民といふものだつたとすれば、イロハがるたの発想が貧相で、へんに小意地の悪い教訓にみちてゐるのも止むを得ない。

けれども、さういふ貧寒とした庶民の生活を考へながら読むと、かるたの文句はなかなか味がある。「犬も歩けば棒にあたる」といふのなど、本当のところどういふ意味か、よく解し兼ねるが、裏長屋のじゆくじゆくした路地で暮らしてゐる男が、仕事にあぶれて食ひつめて、想ひ余つて家を飛び出して行く有

様を考へると、そこに何か思ひがけないものが、——幸、不幸は別にして——待ち受けてゐるといつた事態が、ひとりでにわかつてくるではないか。

「花よりだんご」といふのも、私の好きな文句の一つだ。しかし、この文句で私は、なぜか芥川龍之介の晩年の随筆『本所両国』を憶ひ出す。その中に隅田川の一銭蒸氣に触れて、蒸氣船に乗つた想ひ出をこんなふうに書いたところがある。

僕等はその時にどこへ行つたのか、兎に角伯母だけは長命寺の桜餅を一籠膝にしてゐた。すると男女の客が二人僕等の顔を尻目にかけながら、「何か匂ひますね」「うん、糞臭いな」などと話しはじめた。長命寺の桜餅を糞臭いとは、——僕は未だに生意氣にもこの二人を田舎者めと輕蔑したことを覚えてゐる。長命寺にも震災以来一度も足を入れたことはない。それから長命寺の桜餅は、——勿論今でも昔のやうに評判の善いことは確かで

ある。しかし餡や皮にあつた野趣だけはいつか失はれてしまった。……

「花よりだんご」で、どうしてこの文章を連想するのか自分でもわからない。

しかし、長命寺の桜餅を「糞臭い」と言はれて憤然としてゐる芥川少年を想ふと、それがお花見のだんごに夢中になつてゐる少年の頭に重なつて、頬笑ましい気分になるのである。

ところで私は、イロハがるたの文句を、そらでイから順に憶ひ出さうとして、最初は半分ぐらゐがやつとであつたが、何日もかかつて頭をしぼつてゐるうちに、二、三の文句を除いて大体のところは憶ひ出すことができるやうになつた。しかし、最後までかかつて、どうしても浮かんでこなかつたのは「ヤ」の文句である。見舞ひに来てくれた人に訊いてみると、

「それは『安物買ひの銭失ひ』でせう」

と教へてくれたが、さう言はれると、かへつて何ともいへず腑に落ちぬ想ひ